

『暁斎画談』

文化学園大学助教(美術・博物館実習担当) 岡島 奈音

「古今の名手の筆意を後学の初心者たちに示し、その上で独自の技術を開発させ、ついには古人を追い抜く技量を体得させる」⁽⁴¹⁾ことを目的として明治20(1887)年に刊行された本書は、江戸末期から明治にかけて活躍した絵師・河鍋暁斎(1831-89)の自伝と彼が習得した古画の筆法をまとめたものである。本書は内篇2冊と外篇2冊からなり、内篇は古人の筆法の集成、外篇は幼少期からの暁斎の画業を物語る種々のエピソードや弟子との信州写生旅行の様様を主な内容とする。暁斎本人が挿し絵を描き、文は瓜生政和が担当した。

圧倒的な画力を諧謔の精神で彩った河鍋暁斎は近年、日本美術史において再評価が進みつつある絵師の一人である。7歳で浮世絵師の歌川国芳に弟子入りするが、武士だった父親の教育方針から程なくここを去り、10歳で狩野派の前村洞和の門下に入る。19歳で修業を終えた後、同派絵師の養子となるが、22歳で離縁されたのを機に、土佐派から浮世絵まで画派を問わず筆法研究に勤しんだ。20代後半から「狂斎」の号を用いて戯画、あるいは狂画と呼ばれる滑稽な絵を描くようになり、戯画・狂画は彼の代名詞となる。以後、狩野派絵画と浮世絵、両領域で縦横無尽に筆を振った狂斎だったが、不惑の年、上野・不忍池で開催された書画会での席画が貴顕を愚弄するものとして、3月の間獄に繋がれた。釈放後は号を「狂斎」から同音の「暁斎」に改めたものの、旺盛な活動は変わることなく、肉筆画、浮世絵、版本挿し絵のほか、戯作者の仮名垣魯文と組んで日本初の滑稽絵入り新聞『絵新聞日本地』を刊行するなど、健筆を振るう。「御用」と呼ばれる將軍家や大名から発注された仕事で生計を立てていた狩野派絵師の

多くが、徳川幕府から明治政府への政権交代に伴って仕事が激減、困窮した際も、幅広い顧客層を抱えた暁斎はこの窮状を乗り越えることができた。51歳の時、第2回内国勲業博覧会に出品した「枯木寒鴉」^{こぼくかんあ}で最高賞の妙技二等賞を受賞。晩年を迎えた暁斎宅をアーネスト・フェノロサと岡倉天心が訪れ、開校目前の東京美術学校の教授職を打診したという伝承も残されている。

もっとも、上記の半生を本書外篇の伝記部分からうかがい知ることは難しい。本文を執筆した瓜生政和は、梅亭金篇^{はいていきんぱん}の筆名を持つ戯作者で、滑稽絵入り新聞『團圓珍聞』^{まるまるちんぶん}の主筆を務めた人物でもあるため、史実に沿って暁斎の半生を追うよりも、面白おかしいエピソードを連ねて戯作的な面白さに流れる傾向が随所に見られる。酒飲みで無鉄砲、信心深さもちらりと覗く江戸の人・暁斎の人となりは如実に伝わるが、生涯を知るには、飯島虚心著『河鍋暁斎翁伝』(ペリかん社、1984年)を参照するのがよいだろう。

内篇では、暁斎による絵の学習方法が披瀝される。今でも人物画を学ぶ際に用いる、裸形を描いた上に衣服の線を重ねる学習方法(図1)を暁斎も経験していたことがわかる。ちなみに、この方法は宝暦13(1763)年に狩野派絵師・永良山巖^{えいりょうさんせい}が書いた画事の秘伝書にも記載があり、歴史ある学習法であることがわかる。ポーズ集などでは到底目にするここのないようなアクロバティックな動態表現(図2)は暁斎らしいもので、一見に値する。このほかには、暁斎による日中の古画の模写(図3)が並ぶ。室町時代の画僧である明兆・雪舟から、元信や探幽に代表される狩野派、中国の古画に、やまと絵の土佐派や住吉派、琳派に円山派、岩佐又兵衛や浮世絵師の菱川

師宣、喜多川歌麿に葛飾北斎などが載せられており、特に部分図からは、晁斎が個々の絵師の特徴をどのようにとらえていたのかを読み取ることができるといえる。これらの手法は狩野派の画道修業そのものなのである。

若き日に狩野派に学んだ明治の日本画家・橋本雅邦によれば、狩野派の画道修業は「臨写に始まり臨写に終る」^(*)とされている。臨写とは、手本を可能な限り忠実に写すことである。今日のごとき精緻な複写技術のなかった当時、狩野派の門弟は師匠から借り受けた絵手本を模写することで師匠の筆づかひや賦彩を学ぶと同時に、自分用の絵手本を手に入れることができた。一人前の絵師となった後も、古画を目にする機会に恵まれれば、模写して手元に残すことで絵師としてのひきだしを増やしたし、逆に絵手本を紛失した絵師が廃業に追い込まれたケースもあった。絵手本の収集に熱心な絵師宅では、「絵手本方」という役職を設けて保管・貸借の管理を徹底しており、こうした模写が狩野派絵師としての命脈を保つのに欠くことのできない存在であったことがわかる。

ところが、18世紀前半、秘伝とされていた狩野派の絵手本が、同派に連なる大阪の絵師・橋守国や大岡春^{ウツノ}らによって次々と開板されたのである。公開された絵手本は広く巷間に流布し、古画を目にする機会など持つべくもなかった町絵師らによって積極的に図像が利用された。以降江戸時代を通じて、画派を問わず絵手本や図譜の類は多数刊行されている。本書もそうした時流に乗って出版されたのであろう。

興味深いことに、本書では随所に英文が交じっている。晁斎は弟子の中に外国人を複数抱えていた。最も知られているのは、平成22(2010)年に復元された三菱一号館を設計したイギリス人建築家のジョサイア・コンドルで、彼は「晁英」の号を贈られている。いささかきこえない印象を受ける本書の英文をコンドルら英国人が書いたとは思えないが、本書中の英文表記は彼ら外国人との交流から着想を得て生まれたものに相違ない。明治の日本画家の作画意識や技法が述べられた同時代資料という観点からも、本書は得がたいものである。



図1 「晁斎画談」内上1/8
「河鍋晁斎筆 着服図法」



図2 「晁斎画談」内上1/8
「河鍋晁斎筆 着服図法」



図3 「晁斎画談」内上3/1
「東福寺殿司明兆/筆意」
「建長寺書記啓書記/筆意」

(*)1 晁斎記念館「晁斎画談内篇外篇資料」『晁斎資料I』、1982
(*)2 橋本雅邦「木換町画所」『国華』3号、1889

*飯島虎心「河鍋晁斎翁伝」ベリかん社 1984 (721.9/K)
*飯島半十郎「河鍋晁斎翁伝」河鍋晁斎記念美術館 2012 (721.9/K)